

四ツ塚遺跡

第3次発掘調査報告書

2001

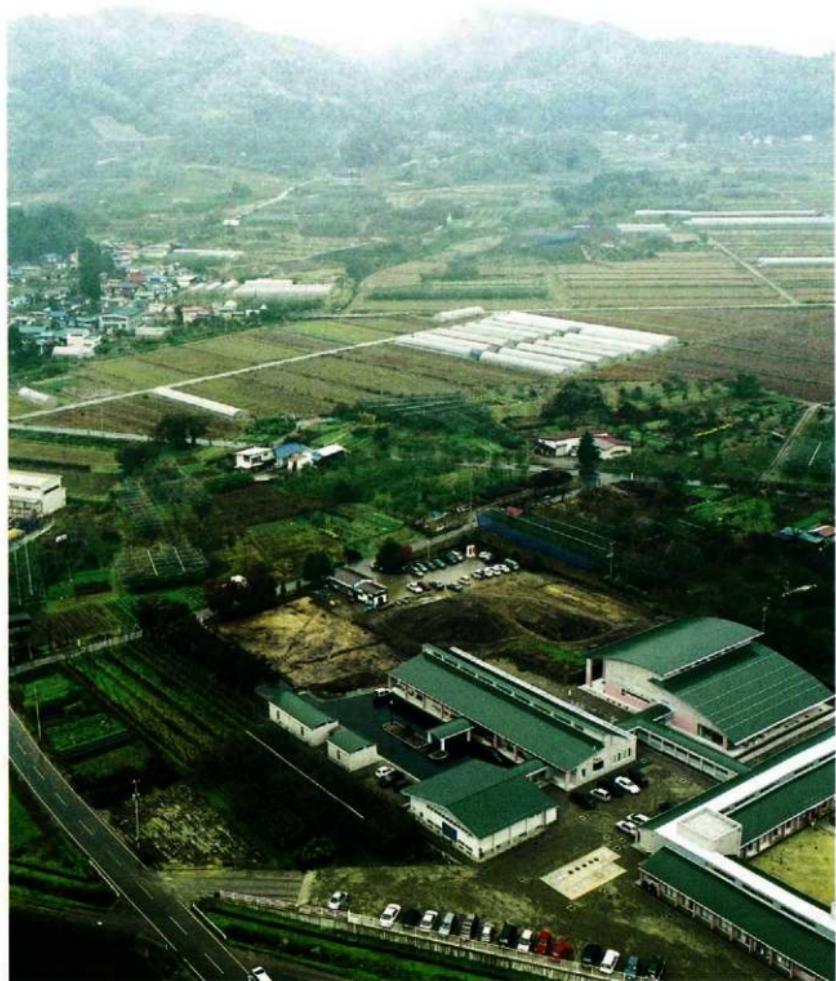
財団法人 山形県埋蔵文化財センター

四ツ塚遺跡

第3次発掘調査報告書

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区全景(東上空から)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、四ツ塚遺跡の調査成果をまとめたものです。

四ツ塚遺跡は、紅花の里として名高い西村山郡河北町に所在します。河北町は、古くから稲作を主とする農業地域として発展してきましたが、近年では工業団地の造成により、食品加工・機械産業をはじめ、全国一のスリッパ生産に代表される工業面での振興も目立っています。

この度、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴い、工事に先立って四ツ塚遺跡の第3次発掘調査を実施しました。

調査では、古代の竪穴住居跡と、これまでの2次にわたる調査で見つかったものとつながる道路状遺構や溝跡が認められました。遺物の量はわずかでしたが、住居跡から村山地方ではまだ出土例の少ない土師器の鍋が見つかりました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に係る「四ツ塚遺跡」の第3次発掘調査報告書である。

2 調査は山形県の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記のとおりである。

遺　　跡　名　四ツ塚遺跡　　遺跡番号　481

所　　在　地　山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場164他

調　　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

受　　託　期　間　平成12年4月1日～平成13年3月31日

現　　地　調　査　平成12年6月26日～平成12年7月5日

　　　　　　　平成12年10月4日～平成12年11月2日

調　　査　担　当　者　調査第四課長　　名和　達朗

　　　　　　　主任調査研究員　齊藤　主税

　　　　　　　調　　査　研　究　員　岡部　博　(調査主任)

　　　　　　　調　　査　員　　豊野　潤子

4 発掘調査および本書を作成するにあたり、山形県健康福祉部障害福祉課、河北町教育委員会、西村山教育事務所、山形県立救護施設みやま荘等関係機関にご協力いただいた。

5 本書の作成・執筆は、岡部　博、豊野潤子が担当した。編集は須賀井新人、高桑弘美が担当し、全体については名和達朗が監修した。

6 委託業務は下記のとおりである。

　　遺構写真実測　　株式会社日本テクニカルセンター

　　理化学試料分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

S T…堅穴住居跡	S B…掘立柱建物跡	S K…土壙
S D…溝跡	S E…井戸跡	S P…ピット
E P…堅穴住居跡の柱穴	E B…掘立柱建物跡の柱穴	
S X…性格不明遺構	R P…登録土器	

2 遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆の基準は下記のとおりである。

- (1) 調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸(Y軸)はN-4° 12'—Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/20~1/800の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- (4) 土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。
- (5) 遺構実測図中の遺物実測図は、原則として1/8で採録した。
- (6) 本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。
- (7) 遺物実測図・拓影図・遺物図版1/3で採録し、各挿図にスケールを付した。
- (8) 遺物実測図中の土器について、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ベタで表示した。
- (9) 遺物観察表中において、()内数値は図上復元による推計値を示している。
- (10) 基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 遺跡の概観	
1 調査区と基本層序	8
2 造構と遺物の分布	8
IV 検出された造構	
1 竪穴住居跡	9
2 溝跡・道路状造構	11
3 土壙	15
V 出土した遺物	17
VI まとめ	20
参考文献	21
報告書抄録	22
付編 「四ツ塚遺跡から出土した骨の同定」	卷末
付図 四ツ塚遺跡造構配置図（第1次・第2次・第3次）	

表

表 1 出土遺物観察表	19
-------------	----

挿 図

第 1 図 遺跡位置図	3
第 2 図 調査区概要図	4
第 3 図 遺構配置図	5
第 4 図 基本層序	7
第 5 図 S T22竪穴住居跡	10
第 6 図 S D145・147他溝跡	12
第 7 図 S D98他溝跡・道路状遺構	13
第 8 図 S K28・50他土壤	16
第 9 図 遺物実測図(1)	18
第10図 遺物実測図(2)	19

図 版

巻頭図版 調査区全景

図版 1 四ツ塚遺跡第1～3次調査合成空中写真
図版 2 調査状況・作業風景
図版 3 遺構検出状況・完掘状況
図版 4 S T22竪穴住居跡
図版 5 溝跡検出状況・溝跡土層断面
図版 6 溝跡土層断面・道路状遺構土層断面
図版 7 土壌検出状況・土壤土層断面
図版 8 出土遺物(1)
図版 9 出土遺物(2)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の調査は、山形県立救護施設みやま荘改築整備事業に伴う第3次調査である。

第1・2次調査は、平成10・11年度に今年度調査区域の東側にあたる部分について行われている（第2図・調査区概要図参照）。

山形県教育庁文化財課が、平成12年度の事業予定地と隣接する部分を含めて、平成11年12月に試掘調査を実施し、7カ所の試掘トレントから溝跡・溝状遺構・土壌・柱穴等の遺構と須恵器壺体部の遺物を検出した。試掘調査結果及び第1・2次調査の状況を基に、関係機関による協議が行われた結果、平成12年度みやま荘改築整備予定地部分について緊急発掘調査を実施することになった。計画当初の調査面積は1,500m²、調査期間は10月2日から11月10日（以後「本調査」と呼ぶ）である。発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

- ◆ 県教育庁文化財課・県埋蔵文化財センターとで、埋蔵文化財発掘調査計画について協議
第1次（H10/1/23）第2次（H11/1/27）第3次（H12/1/20）
- ◆ 県健康福祉部長より県埋蔵文化財センター理事長あてに、「県救護施設みやま荘改築整備事業実施に伴う地区内の埋蔵文化財調査」の依頼
第1次（H10/3/12）第2次（H11/3/17）第3次（H12/3/1）
- ◆ 県健康福祉部長と県埋蔵文化財センターとで「埋蔵物発掘調査業務の委託契約」を締結
第1次（H10/4/1）第2次（H11/4/1）第3次（H12/4/1）

2 調査の経過

平成12年9月13日、河北町教育委員会において、四ツ塚遺跡に係る遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催し、発掘調査に至る経過報告・調査期間・調査体制・調査の方法・安全対策等が確認された。以下に大まかな作業工程を列記する。

重機による表土除去は、9月26日から10月5日まで7日間行った。10月4日に調査事務所を設置し、業務の安全を確認し合い現地調査を開始した。

重機による表土除去と並行して面整理を行い、さらに、グリッド設定・遺構検出・遺構プランのマーキングなどの作業を行った。調査区の位置・内部の区画などを示すグリッドは、5m×5mの大きさで、X軸は西から東にA～U、Y軸は北から南に1～18として座標を設定し、「A-1」グリッドというように位置を標記した。

なお、事業計画の変更により調査面積が当初から2,000m²に増え、事業進行との兼ね合いで、調査区の南側200m²を、6月26日から7月5日まで本調査に先行して調査（以後「先行調査」と呼ぶ）している。さらに本調査において、調査区内の搅乱部分が多いことや遺構数が当初見込みよりも減少することが判明したため、平成12年10月17日に協議を行った結果、調査終了日を11月2日に短縮することになった。その後も遺構検出・遺構精査を繰り返しながら、断面図・平面図等の作成、そして写真撮影を並行して行い、記録作業を進めた。11月1日にはラジコンヘリによる空中撮影・遺構写真実測を行っている。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

四ツ塚遺跡の所在している河北町は、山形県の中央山形盆地の北西部に位置し、東は天童市・東根市、北は村山市、西と南は寒河江市に接している。町の中心谷地は、近世初期までの城下町で、奥羽本線開通までは最上川の河港として栄え、紅花の集散地であった。谷地の八幡神社の舞楽は天平以来のものといわれ、県の無形文化財に指定されている。

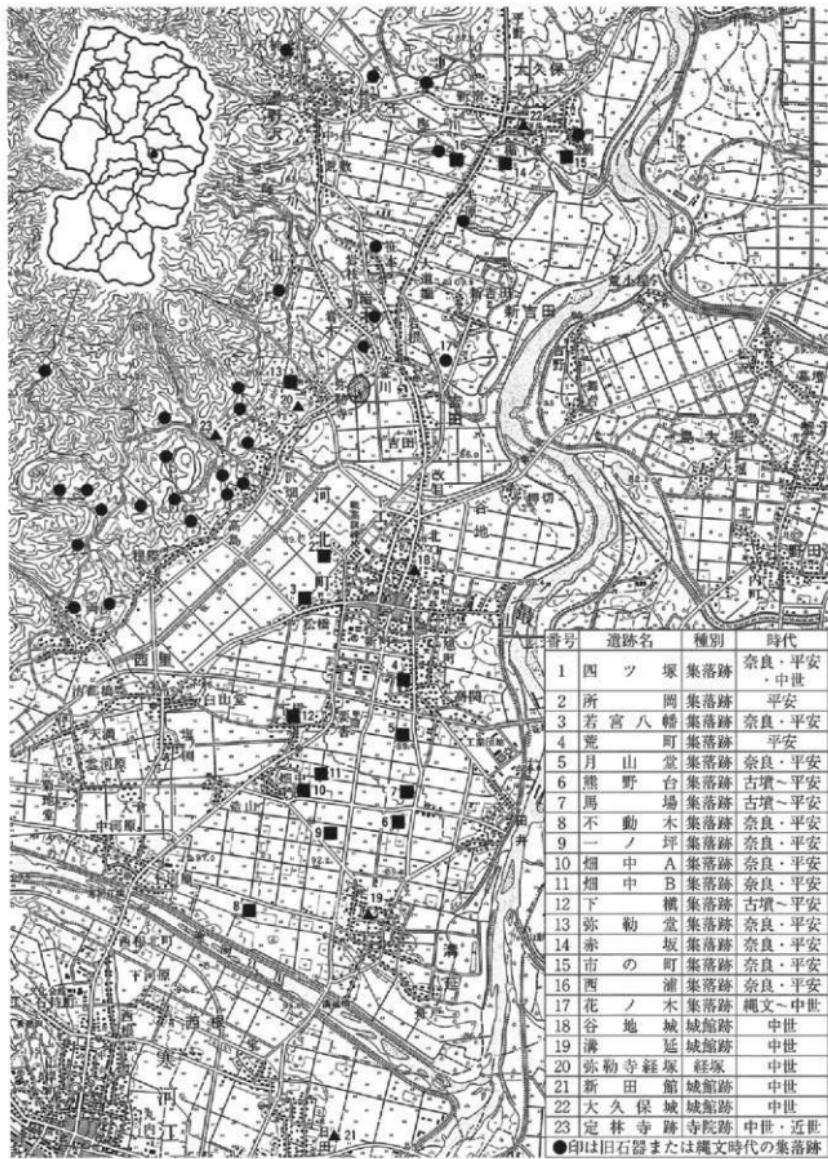
この地区の北西部に葉山火山がある。この葉山の南東方を流下する水系には、法師川・滻ノ沢川・古佐川などがあり、河北町の耕地を潤している。また、寒河江川が町の南縁を区切って北から東に流れ、最上川はその東縁を区切って南から北に流れている。河北町内で出羽丘陵葉山山塊の南東斜面が、南部でおおよそ100mから北へ120m~130mの等高線を形成し、山地と平野部を区分する。町域の70%を占める東部の平野部は、大半が寒河江川の開拓扇状地で、北東部の平野部には最上川の自然堤防や氾濫原が広がる。また、葉山山塊から平野部に南東流する滻ノ沢川が下沢畑から高島地区まで扇状地をつくり、その北部の山麓線と100mの等高線に挟まれた傾斜地域は、同じく南東流する法師川が扇状地をなしたもので、沢畑以北の集落はその扇端部に立地する。四ツ塚遺跡は、法師川扇状地内にあり、その川の右岸にあって山麓寄りに位置し、標高は約100mで南東方に向かって緩やかに傾斜している。この地区的地質分布は、平野部を見るに、礫・砂・粘土などが層をなし肥沃な耕地となっている。これら沖積世の土層は湖成層であって、地下には泥炭層を伴う場合が多い。

2 歴史的環境

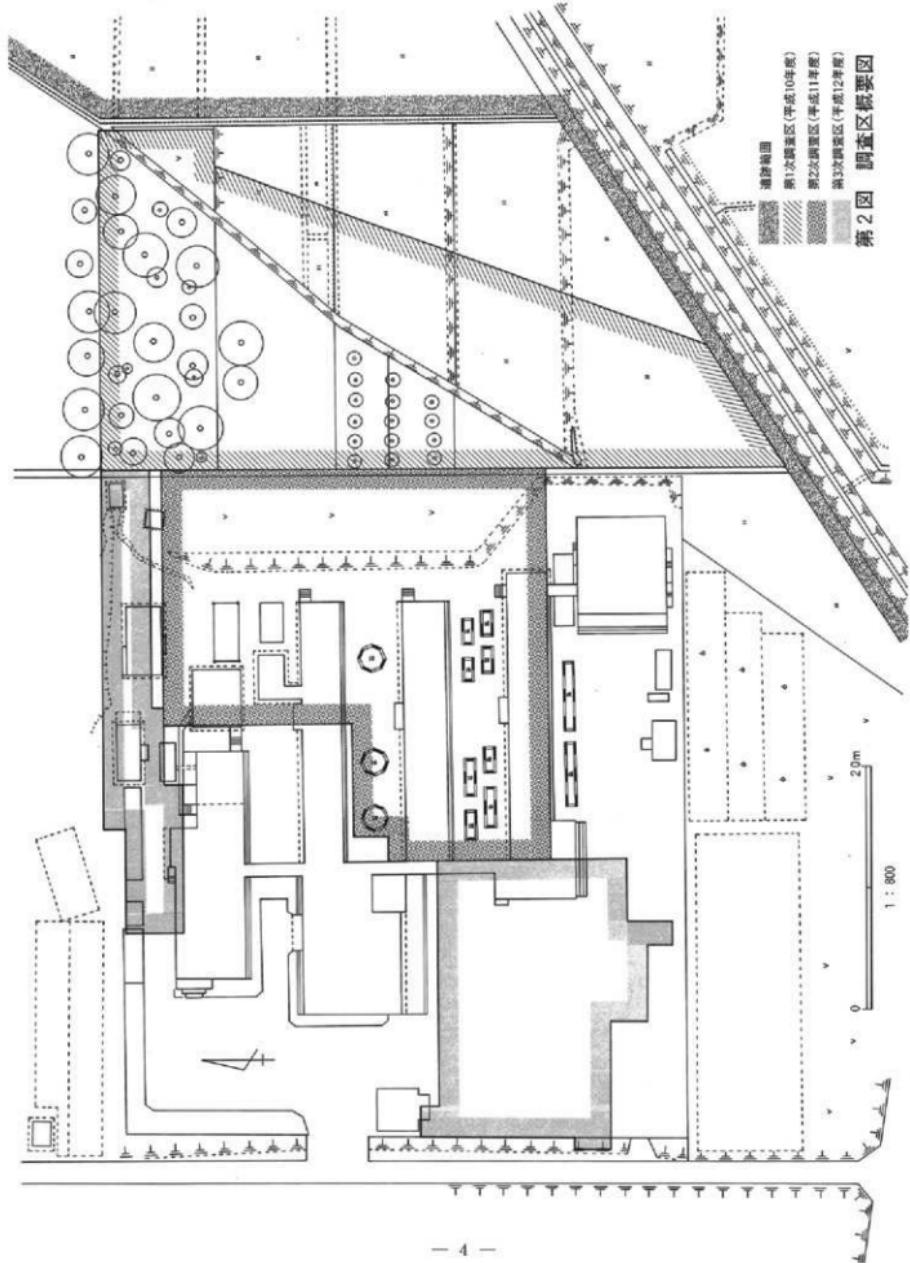
旧石器時代のものとしては、法師森・奥土入・根際山神などの遺跡がある。縄文時代遺跡は、前期は後沢・長慶寺原・奥土入、中期はお月山・慶光寺山A・権現森など、後期は奥土入・長慶寺原、晩期は花ノ木など多くの遺跡があり、いずれも集落跡で、そのほとんどが東部の平野部に臨む丘陵と山麓に分布する。また、それらは中小河川の河岸段丘に位置する。弥生時代の遺物としては、縄文中・晩期からの遺物も発見され現在も調査が進められている花ノ木遺跡から石刀・石庖丁・偏平片刃石斧などが出土している。

古墳時代以降の遺跡のほとんどが、平野部に広がる。遺跡の層は全町的にきわめて厚いといえる。その古墳時代の遺跡は、西里・下横・桑ガ原などがあり、奈良時代の集落跡がお月山・一の坪・不動木、平安時代のものが溝延馬場・月山堂などから発見されている。古墳時代前期から平安時代後期まで継続して営まれた熊野台遺跡もある。熊野台遺跡からは「大刀自」の籠書きのある甕の一部が見つかっている。律令制下では出羽国村山郡に属した。畠中遺跡から「大山郷」と墨書した須恵器坏が出土し、大山郷の所在に迫るものである。また、谷地・溝延の水田面には、広範な条里遺構の分布が確認される(第1図)。

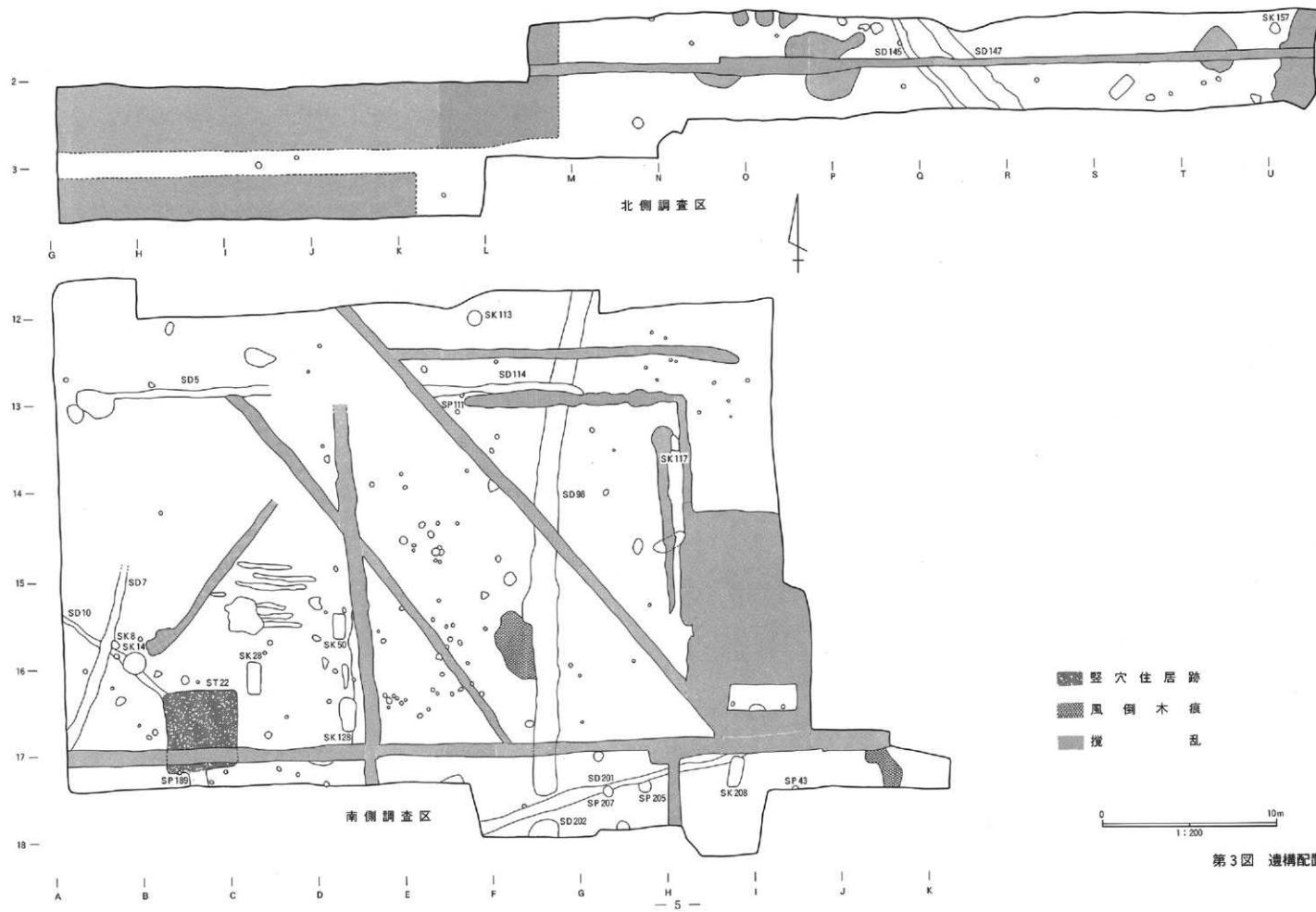
この河北町を含む西村山郡において、奈良時代まで遡る平野山古窯跡が、寒河江市平野山窯跡群である。河北町に隣接する寒河江市の西部丘陵に位置する平野山には、14の窯跡や須恵器ないし瓦の散布地が確認されている。平野山周辺には、柴橋窯跡と長岡窯跡があり、平野山窯跡群に続く時代の10世紀半ばに位置する窯跡が大江町藤田窯跡である。



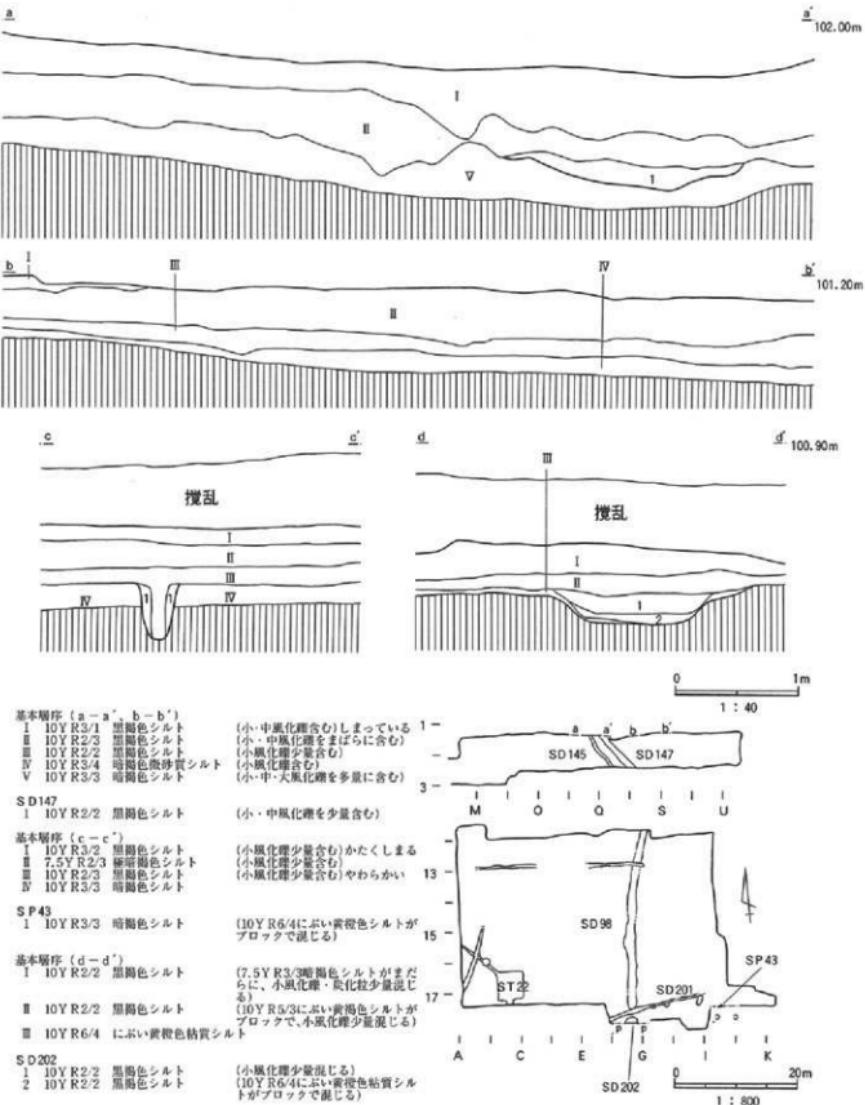
第1図 遺跡位置図(国土地理院発行5万分の1の地形図「福岡」を使用)



第2図 調査区概要図



第3図 遺構配置図



第4図 基本層序

III 遺跡の概観

1 調査区と基本層序

四ツ塚遺跡の第1～3次調査の調査区は、遺跡範囲の東南部分に位置する。出羽丘陵の縁辺部にあたり、法師川扇状地の西辺と接し、西から南東に向かって緩やかに傾斜している。遺跡範囲の大半は、サクランボなどの果樹園や畠地として利用されるが、南東部は水田となっている。水田部分は、過去の開田及び圃場整備により削平を受けている。今年度の調査区は、山形県立教護施設みやま荘のグランド部分などにあたり施設内にある。

今年度調査区は、北側と南側の2ヶ所に離れている(第2図・調査区概要図)。基本層序(第4図)観察は、その北側調査区のP～S-1グリッド北壁2ヶ所と南側調査区のF-17・I-17グリッド南壁の4カ所で行っている。

a-a'・b-b'の第I層の上は耕作土で搅乱部である。a-a'において第V層上面、b-b'ではIV層上面が遺構検出面となっている。b-b'第IV層は、調査区を覆っている柔らかい黒褐色シルトである。

c-c'・d-d'の第I層の上の搅乱部分は施設建設の盛土部分である。c-c'においては第IV層上面、d-d'では第III層上面が遺構検出面になっている。

2 遺構と遺物の分布

遺構は、調査区ほぼ全体に分布する。今年度の第3次発掘調査では、全体で約200基の遺構数を確認している。主な遺構は、竪穴住居跡1棟・溝跡長短合わせて9条、さらに、大小の土壙・ピット・風倒木等を加える。また、第1・2次発掘調査で確認された道路状遺構が今年度の調査でも北側調査区で確認された他、溝跡の延長の可能性が有るものも検出されている。

昨年度の調査区と今年度の調査区の接点が、北側調査区東南縁と南側調査区東縁である。上記の道路状遺構の延長部分が北側調査区で確認されている。今年度調査区内において、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分や給排水配管工事による搅乱部があった。特に北側調査区西半部分については、建物の壁部分の基礎が深く入り込んでいたり、通路部分アスファルト工事等で遺構確認面が深く削られ、既存遺構が隔絶して遺構の構成が把握できない部分がある。

竪穴住居跡は、南側調査区の南西部にあたるところで検出された。建物の南側でも排水管設置による削平部分があり、住居跡は分断される。

全体の遺構数の密度は、第1次から第3次へと漸次小さくなり、遺構数(基)/調査面積(m²)の割合で比べると、第1次は2,000/3,900=0.51、第2次が1,000/3,600=0.28、なのに対して、第3次は200/2,000=0.1である。また、みやま荘敷地内の調査では北西に向かうにしたがって、遺構は希薄となる。

遺物は調査区全域で出土するが、出土遺物総箱数は、整理箱2箱と極めて少ない。竪穴住居跡や溝跡遺構部分から出土した遺物を除くと、表土上や土壙・ピット内・風倒木痕内等覆土内の遺物出土は稀である。遺物構成では、須恵器に比して土師器の割合が高い。

IV 検出された遺構

1 堅穴住居跡

堅穴住居跡は南側調査区の南西部で1棟(S T22)検出されている。S T22は、先行調査の際にその南側部分(約1/3)を検出している。さらにその部分の北半分は排水管設置工事により削平されており、南側部分についても、上部は削られ建物の形状を残すのみとなっていた。その建物の北側部分が秋の本調査によって姿を現し、住居跡の全容が明らかになった。

S T22 (第5図・図版4)

調査区南西部のB・C-16・17グリッドにおいて検出された。S D10がS T22の北西角を切り、S P189が南縁を切っている。先行調査によって確認された南側1/3の建物内で壁溝は検出されておらず、北側2/3の遺存状況が良好であった。平面形は、南北に長軸方向をとり4.5m、東西方向に短軸をとり4.2mを測る隅丸長方形の堅穴住居跡である。方位はちょうど磁北を向いている。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは北壁で29~33cm、東壁は20~21cm、南壁3~7cm、西壁25~32cmを測る。南壁は上部が削平されていると思われる。壁溝が本調査で確認された。ほぼ建物を周囲するもの考えられるが、南側は定かでない。壁溝の断面はU字状を呈する。建物の覆土は3層に分層され、黒褐色シルトを基調とする。

床面は概ね平坦であり、中央から東側と南側に緩やかに傾斜していく。遺構確認面から床面までの深さは、10~16cmを測る。貼床が施されており、床面は固くしまっている。

柱穴は西壁側にE P166・164、中央にE P161・162、東壁側にE P176・182と6基検出されている。柱穴の検出はいずれも住居内の床面上で、長径が20~30cmの円形ないし梢円形を呈する。深さは、床面から5~14cmを測る。柱穴の覆土は單一層または2層に分かれしており、いずれも黒褐色シルトの覆土を伴う。

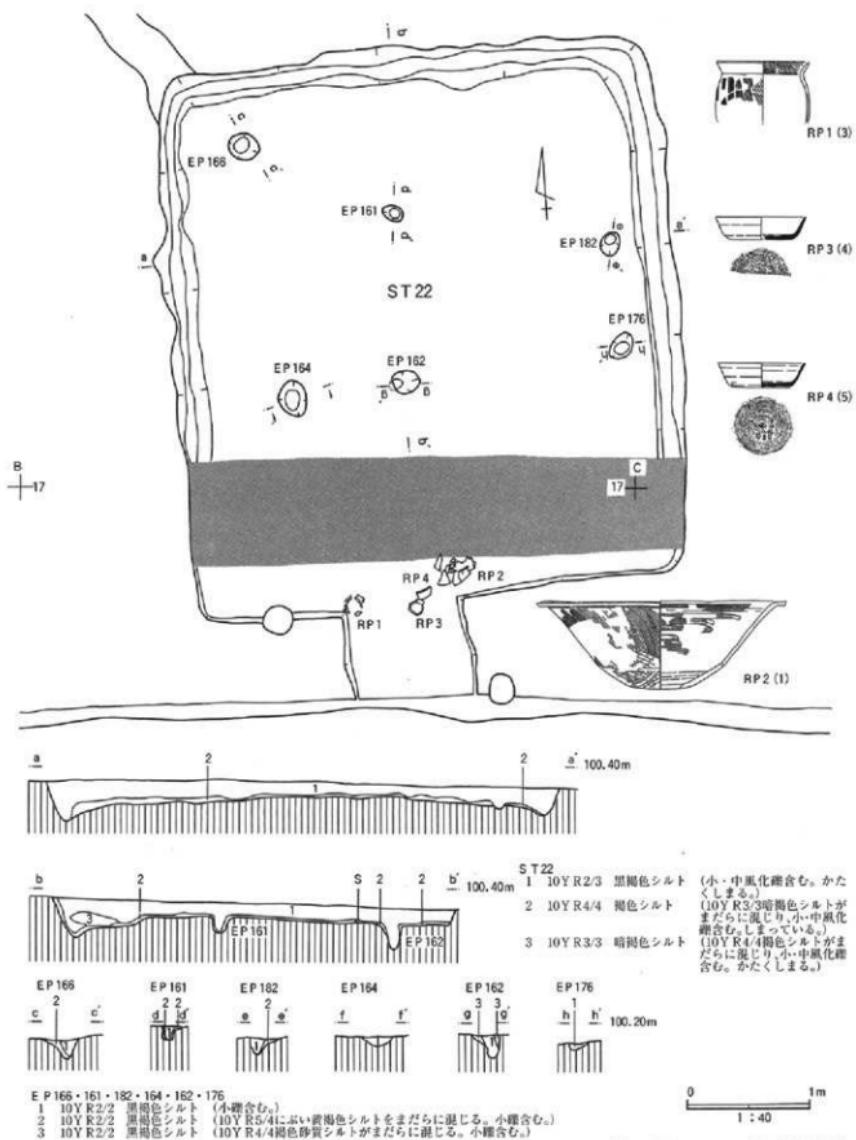
南側中央隅に長軸55cm、短軸45cmを測る梢円形の落ち込みがあり、その上部で堀(2)が出土している。また、南側から幅80cm深さ2cmの溝状の落ち込みが調査区南壁まで続いている。前述の梢円形の落ち込みと共に炉・カマド跡の可能性も否定できないが、梢円形の落ち込みの測にわずかに焼土が確認されたのみで、他に炉・カマド跡の痕跡がなく不明である。

S T22内出土遺物で図示(第9図)したものは5点で、土師器の壺(2・3)、須恵器の壺(4・5)、堀(1)がある。実測遺物のうち4点(1・3~5)が、S T22の南側で出土している。須恵器の壺の底部切り離しは2点とも回転ヘラ切りによるもので、土師器の壺は、非ロクロ成形である。堀は、口径が40cmの大堀で、底部は丸底になっている。S T22では、小片も合わせて85点の遺物が出土している。その8割は土師器である。

本住居は昨年度の調査で確認されているS T365の覆土や出土遺物共に類似しており、同時期・同時代の所産と思われる。

本住居の時期は、出土した土器の観察結果に基づいて、8世紀末・奈良時代の後半と考える。

検出された遺構



第5図 ST 22竪穴住居跡

2 溝跡・道路状遺構（第6・7図・図版5・6）

溝跡は、長短合せて9条検出されている。溝については、切り合いによって新旧関係が分かるものから記述を並べ、関連性がある溝へと掲載する。第1～3次の発掘調査からおおよその時代が推定されるが、今回の第3次調査で検出された溝跡から出土した遺物はほとんどなく、時代を決定する要因は薄い。

S D 7（第6図・図版5）

A-16グリッド・南側調査区南西角を基点とすると、そこからほぼ直線的に北東に延び、A-15グリッドでS D 10を切る。そのS D 7との交差点から北西へ約5mほど進んだ所で、削平され消滅する。総延長は10.3m、幅は45～66cm、深さは確認面から約10cmを測る。北西に走るときの東西の壁は、両壁とも緩やかに立ち上がるが、西壁に比して東壁の立ち上がりがやや急である。覆土は、単一層で黒褐色シルトを基調とする。この溝から遺物の出土はない。

S D 10（第6図・図版5）

A-15グリッド・南側調査区西壁から南東へほぼ直線的に延びる。A-15グリッドでS D 7に切られ、同グリッドでS K 14に切られ、S T 22を切る。南端はS T 22で消え不明である。総延長は7.3m、幅は13～25cm、深さは確認面から10cmを測る。南北の壁は、ほぼ緩やかに立ち上がる。底面は大小の礫を含む地山がみられ凹凸がある。覆土単一層で、礫を含む黒褐色シルト基調とする。遺物の出土はない。

S D 98（第6・7図・図版5・6）

F・G-11～17グリッドにおいて検出された。溝幅・長さ・深さとも今調査区最大の溝である。南側調査区北壁の(G-11グリッド)から南方向にはほぼ直線的に延びる。南端はF-17グリッドにあり、S D 201に切られる様相を呈する(遺構検出面上では未確認)。総延長は30m、幅は100～130cm、深さは確認面から34～63cmを測る。底面は概ねなめらかで、東西の壁ともゆるやかに立ち上がる。西壁が東壁に比して傾斜が緩やかである。覆土は3～4層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。このS D 98から須恵器の高台付坏(6)・坏(10)・壺(7～9)が出土している。

S D 202（第6・7図・図版2・5）

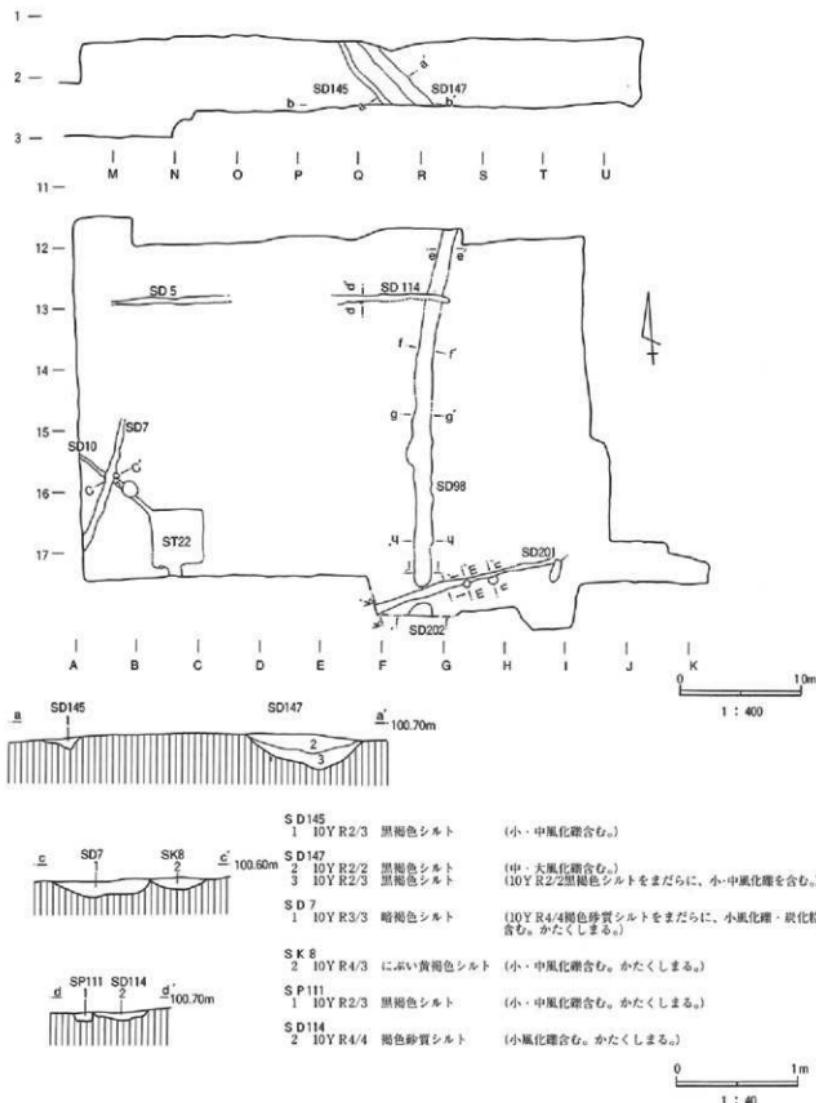
F-17グリッドで検出された。全容は調査区外へ延び、性格不明遺構(S X)とも見られる遺構であるが、S D 98と同様の幅・深さ・方向を呈し、覆土もまた類似していることからS D 98と関連性が高くまた、調査区外・南方向へ延長が考えられる溝と捉えている。

土師器の小片が1つ出土している。

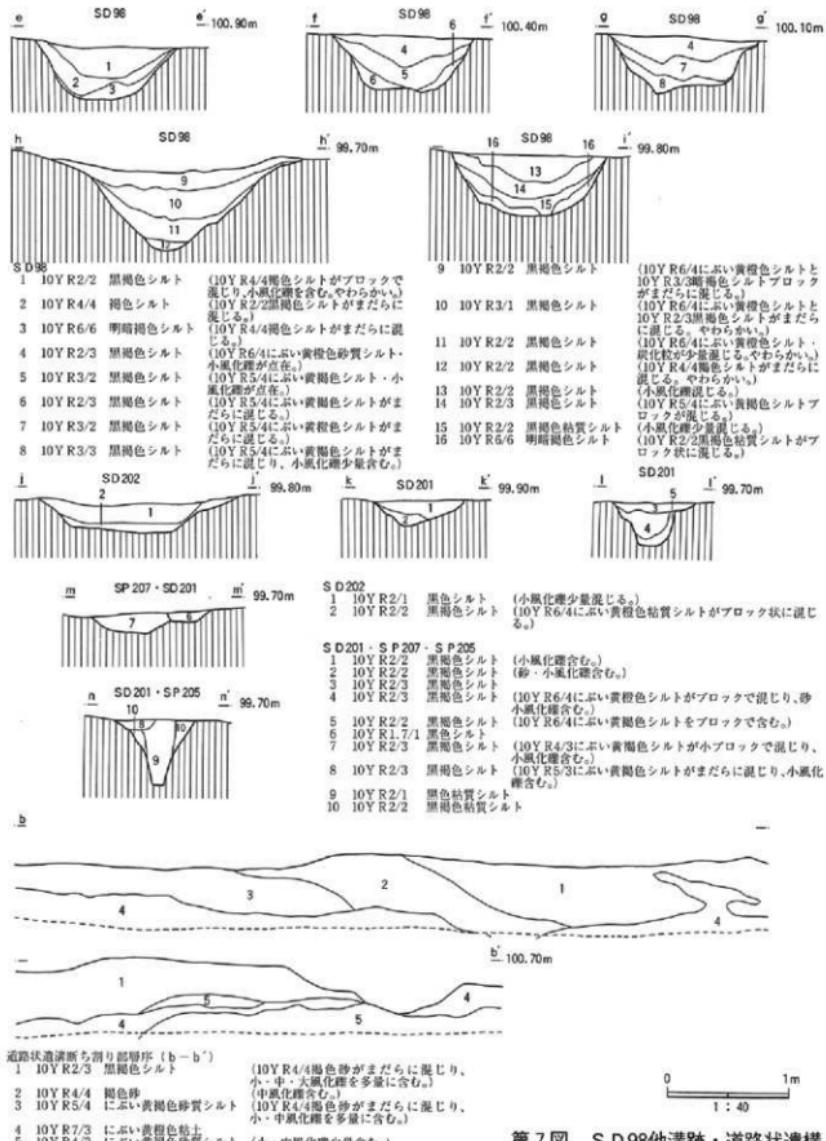
S D 201（第6・7図・図版5・6）

E～H-17グリッドで検出された。E-17グリッドから東北東に直線的に延び、H-17グリッドで搅乱部分に消える。G-17グリッドでS P 207に切られ(断面m-m')、同グリッドでS P 205を切る(断面n-n')。また、H-17グリッドでS K 208に切られる。総延長は14.7mで幅は30～80cm、確認面からの深さは、5～40cmを測る。南北両壁の立ち上がりは概ねなめらかであるが、F-17グリッド部分で深く掘り込まれた部分がある(断面1-1')。覆土は1～2

検出された遺構



第6図 SD145・147他溝跡



第7図 S D 98他溝跡・道路状造構

層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。この溝からは、土師器の壺の体部小片が1つ出土している。

道路状遺構（第6・7図・図版5・6）

北側調査区の東にはほぼ並行して走る2条の溝跡が検出された。東側にSD147、西側がSD145である。SD147は、Q-1・2、R-2グリッドで検出される。Q-1グリッドの北壁から直線的に南東へ延び、東端は北側調査区南の削平部分に消える。総延長6.9m、幅80~120cm、確認面からの深さは14~30cmを測る。東西壁とも概ね緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分かれ、黒褐色シルトを基調とする。底面は、大小の礫を含む地山がみられ凹凸がある。

このSD147は、第1~3次発掘調査遺構配置図(付図)より、第1次調査で検出されたSD555、第2次発掘調査のSD959の北西延長上にある溝跡のように思われる。今回第3次調査では、道路状遺構を挟む2条の溝のうち、西側の溝が検出されなかった。第2次調査において道路西側のSD124が向きをやや西に傾け、北端が削平されていることを考えると、第2次調査で検出されたSD124の延長部分は不明である。

道路面の断面を観察すると、SD147の掘り込みは、基本層序b-b'において第V層を掘り込んでいる(第4図)。また、道路状遺構断ち割り部層序b-b'において1~3層は、人為堆積とは考え難く、堆積状況と土層観察からむしろ自然堆積と捉えられる。

出土遺物は、SD147から須恵器の高台付坏(16)が出土している。

第1次調査では、道路状遺構の両脇を挟む溝としてSD555とSD1002が検出され、さらに、第2次調査の道路遺構を挟む溝SD959とSD124が検出されている。西側SD124から15世紀代と思われる青磁の碗(63)が出土している。よってこのSD124に挟まれる部分は、古代から中世まで道として機能或いは再利用された可能性がある。

SD145（第6・7図・図版5）

P・Q-2、グリッド、道路状遺構面より検出された。北側調査区北壁P-1グリッドから南東へほぼ直線的に延びる。総延長6.4m、幅35cm~60cm、深さは確認面から10~15cmを測る。南北の両壁とも緩やかに立ち上がる。底面は大小の礫を含む地山がみられ、凹凸がある。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調としている。第4図の基本層序b-b'の断面に見られるように、道路遺構層を切った掘り込みはない。また、この溝からの遺物の出土もなかった。

その他の溝（SD114）（第6図・図版5）

G-12グリッドから検出された。東西に直線的に延びる溝で、東西端は、検出されず不明である。SD5と繋がる可能性のある溝と思われるが、両溝とも遺物の出土はなく不明である。総延長は2.5m、最大幅20cm、確認面からの深さは10cmを測る。南北壁共緩やかに立ち上がり、覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。

3 土壙

土壙は、南北調査区とも検出されている。SK28・SK50・SK128・SK208は、南側調査区南部で検出した「南北に長く、平面形は隅丸長方形を基調とする」という規格性が窺える土壙群である。

SK28 (第8図・図版7)

C-16グリッドに位置する。長軸196cm、短軸80cmの隅丸長方形で南北に長い。深さは確認面より46cmを測る。覆土は5層に分かれており、1・2層は黒褐色シルト、3~5層は黒褐色砂質シルトを基調とする。壁は東・西・北壁がほぼ垂直に立ち上がり、南壁はそれらに比して緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦で凹凸がない。出土遺物はない。

SK50 (第8図・図版7)

D-15グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し南北に長い。長軸155cm・短軸73cm、確認面からの深さは25cmを測る。覆土は黒褐色シルトを基調とする単一層である。東・西・北壁は急に立ち上がるが、南壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央に浅い窪みがあるものほぼ平坦である。出土遺物はない。

SK128 (第8図・図版7)

D-16グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南北に長い。長軸190cm・短軸80cm、確認面からの深さ30cmを測る。掘方は、北・東・西壁ではほぼ垂直に立ち上がり、南壁はなだらかな傾斜をもって立ち上がっている。覆土は単一層で、黒褐色シルトを基調とする。出土遺物はない。

SK208 (第8図・図版7)

H-17グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で南北に長い。長軸175cm・短軸70cm、確認面からの深さ30cmを測る。底面は概ね平坦である。覆土は2層に分けられる。1・2層とも黒褐色シルトを基調とする。2層には炭化粒が点在している。遺物は出土していない。

SK157 (第8図・図版7)

南側調査区、U-1グリッドに位置する。平面形は円形で、長径66cm・短径61cmを測る。確認面からの深さは20cmで、すり鉢状になだらかに掘り込まれている。覆土は単一層で、黒色シルトを基調とする。覆土内に骨片を確認し分析(付録)にかけた。

遺物の出土はなく、他の遺構との切り合いもない。

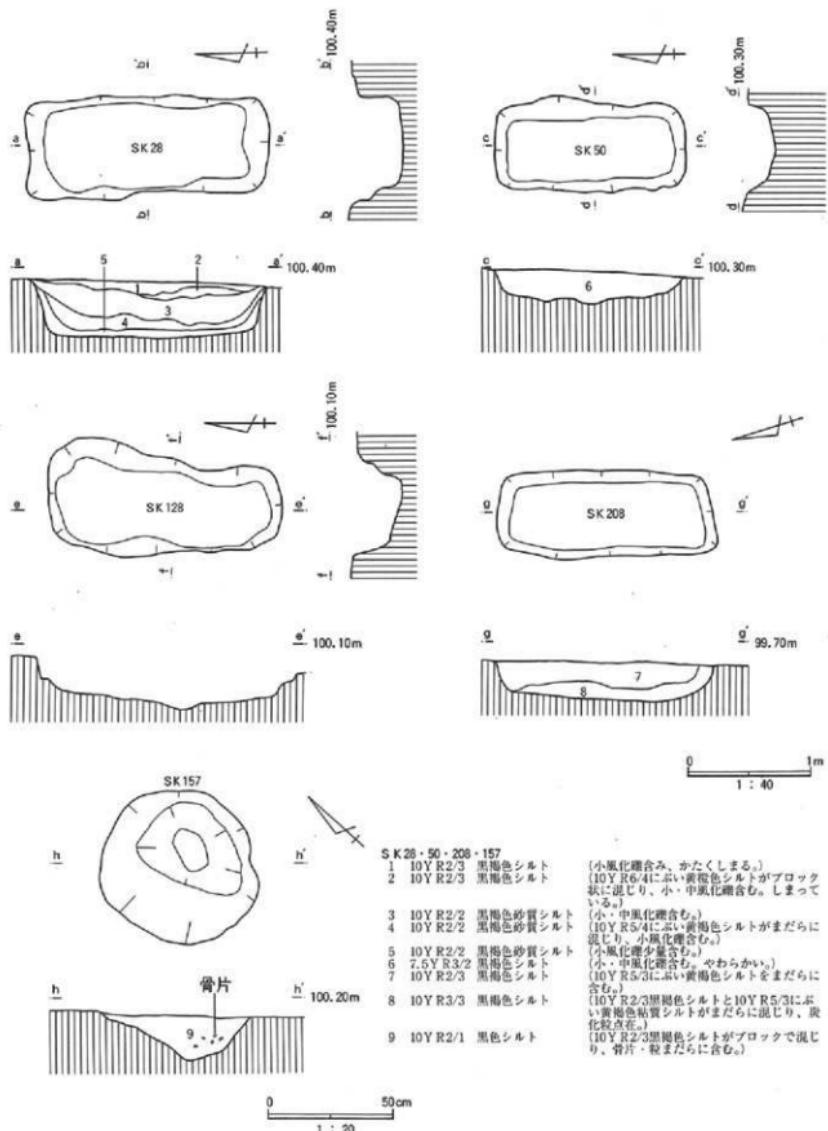
SK117

南側調査区東部、G・H-13グリッドに位置する。東西を攪乱部に挟まれ、平面形は不明である。南北の幅は100cmある。確認面からの深さは10~20cmを測る。覆土は単一層で、暗褐色シルトを基調とし、覆土内から土師器壺の口縁部(14・15)が出土している。

SK113

南側調査区北部、E-11・12グリッドに位置する。平面形は円形で、長径87cm・短径80cm、深さ75cmを測る。底面はほぼ平坦な円形をしており、壁が底からほぼ垂直に筒状に立ち上がる。遺物の出土はない。

検出された遺構



第8図 SK 28・50他土壤

V 出土した遺物

今年度の第3次調査で四ツ塚遺跡調査から出土した遺物は、整理箱にして2箱である。面整理時の遺構確認面上で検出されたものは少なく、出土遺物の多くは竪穴住居跡・溝跡・土壤等の遺構に伴う遺物である。遺物出土密度は、第1・2次のそれよりさらに薄くなり、図化できたものは16点である。土器は土師器・須恵器を中心に出土している。以下にそれらを記述する。

1 S T22出土土器（第9図・図版8・9）

竪穴住居跡の床面または検出面上である程度まとめて出土している。遺物の出土は、東西の中心線より南に偏っている。土師器の壙(1)・甕(2・3)、須恵器の壺(4・5)が出土している。個体数的には須恵器よりも土師器の方の割合が高くなっている。

1の壙は丸底で、口縁部に向かい緩やかな弧を描いて立ち上がり、体部上部は直線的になる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部が上方につまみ出されている。体部内外面共にハケメ調整、また、丸底の外面にはケズリ調整が施されている。土師器の甕は、口縁部が「く」の字状に外反しているものが中・小2点出土している。2は破片資料である。3は、内外面にハケメ調整が施されている。須恵器の壺で図化できたものが2点である。両方とも須恵器の底部切り離しは回転ヘラ切りである。4の底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整の痕がある。またその内面には火捺の跡が確認された。4は底部から口縁まで直線的に立ち上がり口唇部近くでやや外反する。5は底部から口縁まで直線的な立ち上がりを呈している。

また、須恵器の蓋も小破片で出土している。

2 S D98出土土器（第9・10図・図版8・9）

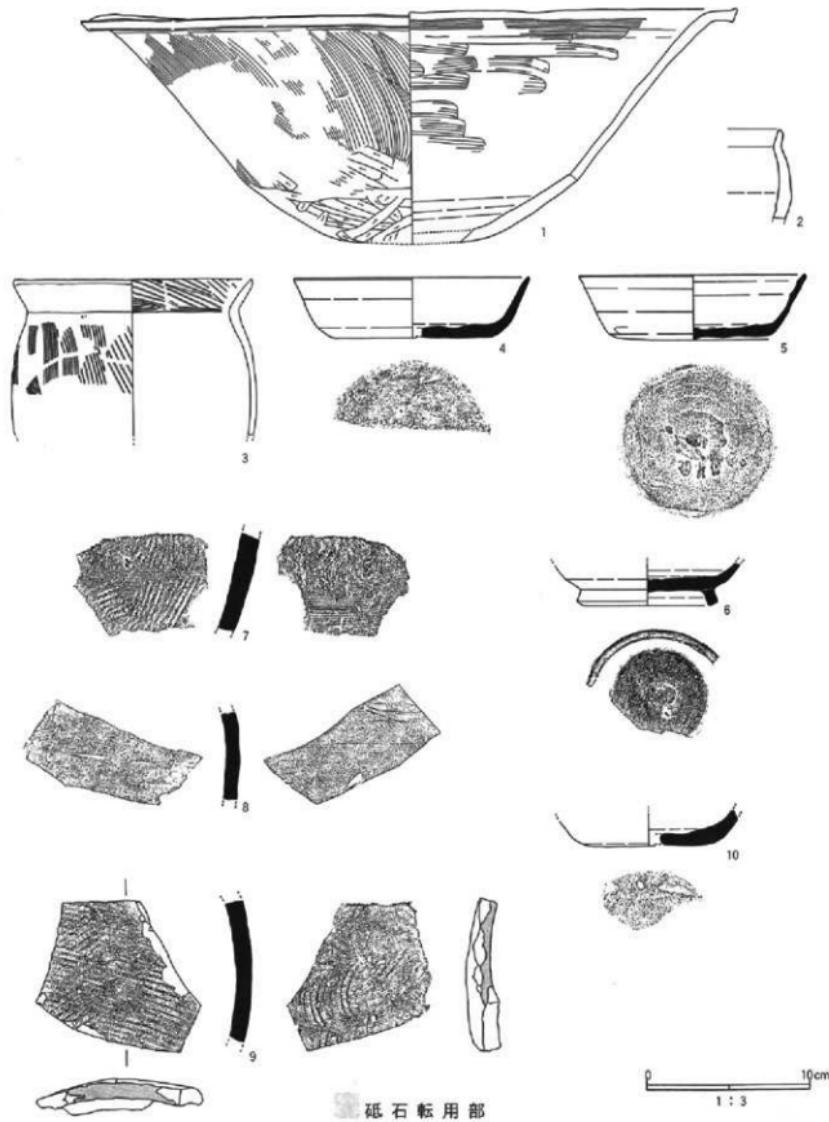
S D98は、南側調査区を東西に分割するような、幅約1m・総延長30mの大溝である。出土した遺物は、器種は須恵器に比して土師器の占める割合が大きくなっている。出土した土器は、土師器の甕(11)、須恵器の高台付壺(6)・壺(10)・甕(7~9)、縄文土器の甕(12)、陶器の鉢(13)である。土師器の甕11は、下半~底部の破片資料である。6の高台付壺の底部切り離しは、回転ヘラ切りである。7~9の資料はいずれも破片資料である。7・9の打圧調整のタタキとアテの組み合わせは、平行タタキと同心円状アテ痕である。9は左と下側面を砥石に転用された痕跡がある。8の資料は外面にケズリが施されているもので、S D98の直床面から出土している。

縄文土器(12)・陶器(13)は、S D98遺構確認面上で出土した資料であるが、流れ込みの可能性が考えられる。13には自然釉が確認される。

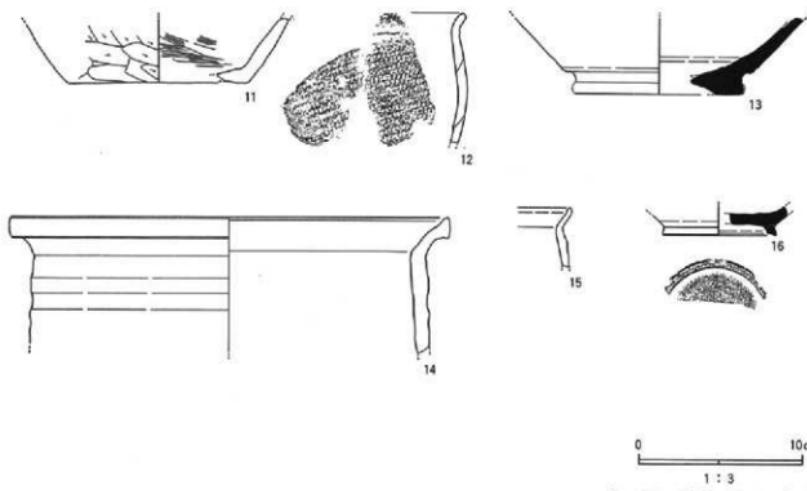
3 その他の出土土器（第10図・図版9）

S K117から土師器の甕(14・15)が出土している。14は器厚が厚く、口縁部が短く「く」の字状に外反し、口唇部が上につまみ出されている。いずれも口縁部のみで、内外面にロクロ調整の痕がある。

S D147からは須恵器の高台付壺(16)底部が出土している。底部の切り離しは回転糸切りが確認される。



第9図 遺物実測図(1)



第10図 遺物実測図(2)

出土遺物観察表

通 考 査 番 号	遺 物 番 号	器 種	器形	出土地點	計 測 値 (mm)			成 形			胎 土	燒 成	色 調	備 考	
					口徑	底径	器高	器厚	外 面	内 面					
第 9 回	1	土師器	壺	S T22	400		(150)	6	ロクロ-ハケメ ナズリ	ロクロ ハケメ		繊砂混	良	橙色	R P 2、約3/4残存
	2		甕				8	ロクロ ハケメ	ロクロ		繊砂混	良	にぶい褐色	内面にキズ有	
	3		壺		146			ハケメ-ナデ	ハケメ		繊砂混	良	浅黃褐色	R P 1	
	4	須恵器	壺		(144)	(98)	37	4	ロクロ	ロクロ	目輪ヘラ留りナデ	繊砂混	良	黄褐色	R P 4、薄面骨針混入
	5		壺		138	92	40	3	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	繊砂混	良	淡黄色	R P 3、薄面骨針混入 内面に火拂痕有
	6		高台付壺			(76)	(4)	ロクロ	ロクロ	目輪ヘラ留りナデ	緻密	良好	灰色	R P 5、薄面骨針混入	
	7	須恵器	甕				(9~11)	タタキ ハケメ	アテ ハケメ		緻密	良好	灰白色	R P 6、平行タタキ目 同心円状アテ紙	
	8		壺				(8)	ケズリ	ロクロ ケズリ		緻密	良好	灰白色	直床から出土	
	9		壺				(10)	タタキ	アテ		緻密	良好	灰色	側面を砾石に転用	
	10	土師器	壺			(80)		ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り	繊砂混	良	淡黄色		
	11		甕			(110)	(5~8)	ケズリ	ハケメ		繊砂混	良	橙色		
	12		陶器				5				繊砂混	良	褐色	内面に炭付着	
第 10 回	13	鉢		SK 117				ケズリ	ロクロ		緻密	良	灰褐色	外面に施釉	
	14	土師器	甕		(266)		(8~12)	ロクロ	ロクロ		繊砂混	良好	浅黃褐色		
	15		壺				5.5	ロクロ	ロクロ		繊砂混	良	橙色		
	16	須恵器	高台付壺		(70)			ロクロ	ロクロ	回転余切り	緻密	良	褐灰色	薄面骨針混入	

VII まとめ

今回の調査は、教護施設「山形県立みやま荘」改築整備事業に伴う緊急発掘調査である。第1次調査で3,900m²、第2次調査が3,600m²、さらに今年度第3次で2,000m²が調査対象となった。今年度の調査で一昨年度の調査区と繋がり、四ツ塚遺跡推定面積70,000m²のうち9,500m²が発掘されたことになる(付図)。

四ツ塚遺跡は山形盆地の北西部、河北町吉田に所在し、出羽丘陵の山麓一帯の段丘を形成する法師川などの開析扇状地内にあり、その川の右岸にあって山麓よりに位置する。標高は、約100mで南東方に向かって緩やかに傾斜している。

第3次発掘調査で検出された主な遺構は、竪穴住居跡1棟、溝跡9条以上、道路状遺構などである。さらに大小の土壙・ピット・風倒木を加え、登録した遺構は200基を越える。出土したおもな遺物は、土師器・須恵器など、整理箱にして2箱である。遺構・遺物は、調査区ほぼ全体に分布する。

第2次調査区と第3次調査区の接点は北側調査区東の南縁と、南側調査区の東縁である。今年度の調査区内において、解体された建物の基礎部分が遺構検出面下まで入る部分が多くあり、特に北側調査区西の部分について削平部分が広がり、構成が把握できない部分があった。

調査区の南西部で、壁溝を伴う竪穴住居跡が検出された(S T22)。出土した土器の観察結果に基づいて奈良時代に溯る遺構であることが比定でき、出土遺物は、昨年度第2次調査区の西側で検出された竪穴住居跡(S T365)と類似している。

第3次検出のS D98について、第2次調査で検出されたS D123の延長、または中世の区画溝の役割があるものと考えるが、遺物も断片的であり、中世の確実な遺構も周りにないことから、断定はできない。

溝跡に関しては、第1次調査で中世の区画溝と考えられていたS D1610とS D1603の延長部分が第2次調査でS D312やS D402として検出されている。

道路状遺構を挟む溝跡第1次S D555・S D1002、第2次のS D959・S D124の延長部分として3次ではS D147が検出されている。また3次のS D145は、第2次調査で検出されたS D998の延長部であった。

出土遺物では、S T22からの出土土器が昨年度のS T365・S B4周辺遺構等また同じ河北町に所在する不動木遺跡や熊野台遺跡の出土土器の中に散見され、実年代では8世紀半ば以降、奈良時代の後半の土器群として捉えられる。また、「山形県の古代土器編年」(阿部・水戸:1998)によると8世紀第3・4四半期まで溯る土器と考えられる。

第1次調査においては底部回転ヘラ切の坏や8世紀第4四半期と捉えられている稜碗がS K858から出土している。第2次調査では、8世紀第2四半期~第3四半期と捉えられる坏がS D982より出土している。

中世の遺物としては、第1次調査で北宋銭(S T658)や鉄鎌、第2次調査では15世紀代のものと捉えられる青磁碗(S D124)が出土している。

S T22出土土器の中に丸底の堀(1)がある。同じ河北町内の熊野台遺跡からも丸底の堀が出土しているが、今年度出土した事例より口縁部の特徴や体部の立ち上がりの傾斜に違いがみられる。山形県内では丸底の堀の出土例は庄内地方に片寄っており、村山地方における丸底堀(熊野台遺跡:1980・高瀬山K遺跡:1990等)の出土例は少ない(「山形県埋蔵文化財報告書・山形県埋蔵文化財センター報告書」より)。

第1～3次調査の結果から四ツ塚遺跡は8世紀半ばから9世紀末、さらに中世まで断続的に営まれた集落跡であることが推測される。

〈参考文献〉

- 佐藤庄一他：「熊野台遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第31集
長橋至他：「不動木遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第100集1986
佐藤正俊他：「達磨寺遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第104集1986
阿部明彦・
水戸弘美：「山形県の古代土器編年」第25回古代城柵官衙遺跡検討会資料1998
高橋敏他：「四ツ塚遺跡発掘報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第70集：1999
岡部 博・
豊野潤子：「四ツ塚遺跡第2次発掘報告書」
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集2000
- 「山形県埋蔵文化財報告書」
「山形県埋蔵文化財センター調査報告書」
「河北町史上巻」
「西村山郡大堰土地改良区史」1992
「山形県の地名」「日本歴史地名体系6」平凡社1990

報告書抄録

ふりがな	よつづかいせきだい3じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	四ツ塚遺跡第3次発掘調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第90集
編著者名	岡部博 豊野潤子
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
発行年月日	2001年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よつづかいせき 四ツ塚遺跡	山形県 西村山郡 河北町 大字吉田 字馬場 164他	6321	481	38度 26分 43秒	140度 18分 49秒	20000626 ~ 20000705 20001004 ~ 20001102	2000	山形県立教 護施設みや ま荘改築整 備事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	奈良・平安	竪穴住居 溝 土壙	1 須恵器(坏・高台付坏・甕) 2 土師器(壙・甕)	壁溝を伴う竪穴住居跡が確認され、その建物内で丸底の大壙が出土した。
集落跡	中世	溝 土壙 道路状遺構	3 4 1	墓壙と見られる土壙が4基確認された。1次・2次と同じ道路状遺構の続きが検出された。 (総出土箱数: 2)

図 版



第1次調査区(下)・第2次調査区(中)・第3次調査区(上・中右)合成空中写真(右が北)

図版 2



重機による表土除去



面整理



遺構検出状況(北西から)



遺構精査



基本層序第4図 a—a' (北西から)



基本層序第4図 b—b' (北西から)



基本層序第4図 c—c' (北から)



基本層序第4図 d—d'・S D 202完掘状況(北から)



調査区南遺構検出状況(S T 22付近)(西から)



調査区南遺構検出状況(S D 98南端付近)(北西から)



北側調査区遺構検出状況(西から)



南側調査区遺構検出状況(北東から)



南側調査区完掘状況(東から)

図版 4



S T 22断面第5図 a-a' (北から)



S T 22南遺物出土状況(東から)



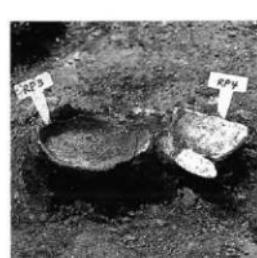
S T 22断面第5図 b-b' (西から)



R P 1(3)出土状況(北から)



S T 22竪穴住居跡完掘状況(東から)



R P 3・4(4・5)出土状況(南東から)



SD 145 土層断面第6図 a-a' (南東から)



SD 147 土層断面第6図 a-a' (南東から)



SD 145・SD 147 完掘状況(北西から)



SD 7 (SD 10)・SK 8 土層断面第6図 c-c' (南東から)



SP 111・SD 114 土層断面第6図 d-d' (東から)



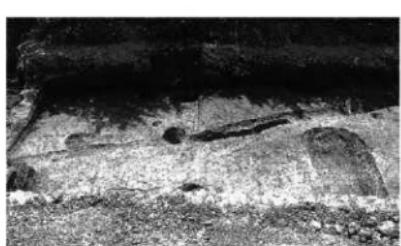
SD 98 検出状況(北から)



SD 98 完掘状況(南から)

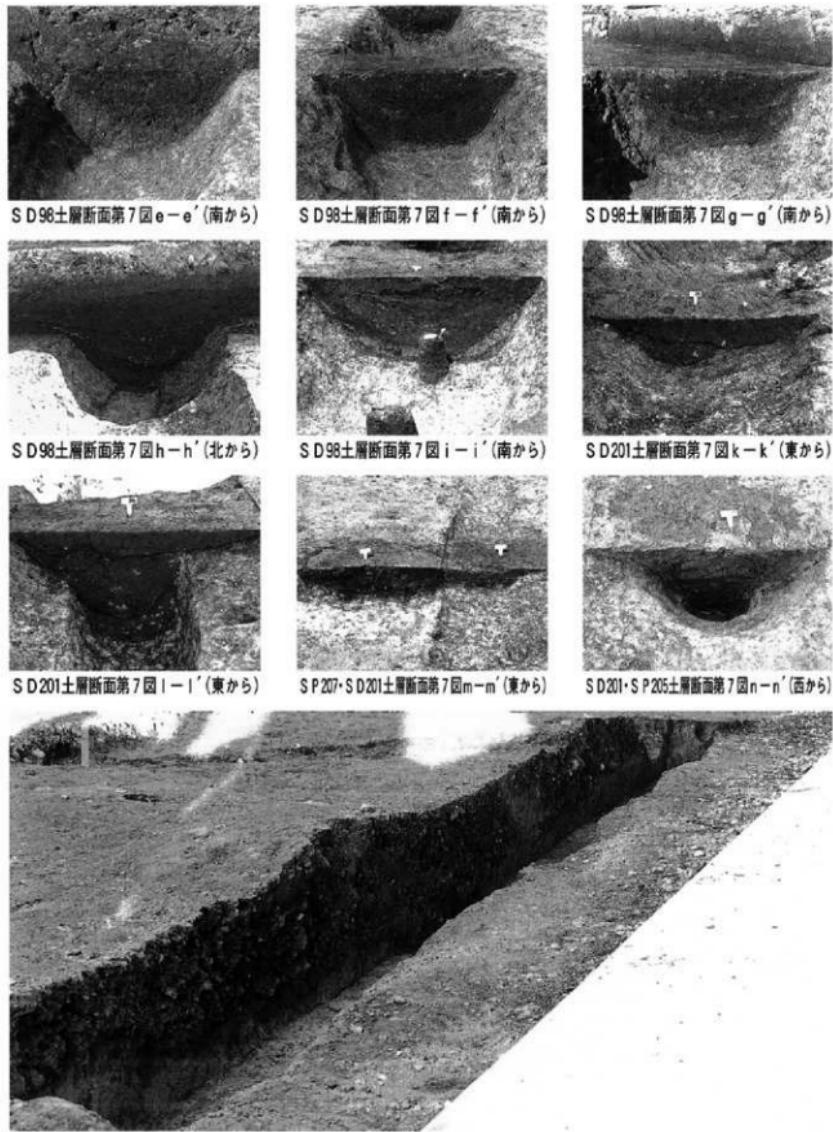


SD 98・SD 201・SD 202 検出状況(北から)



SD 98・SD 201・SD 202 完掘状況(北から)

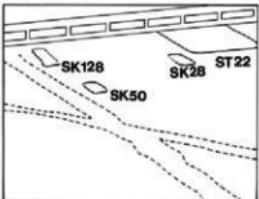
図版 6



道路状遺構断ち割り断面第7図 b-b' (南西から)



S K 28・50・128土壤他検出状況(北東から)



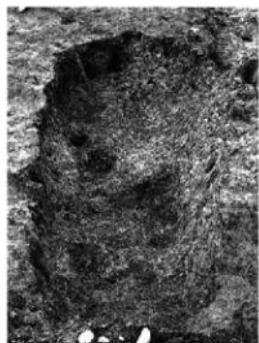
左写真模式図



S K 28土壤断面(南西から)



S K 28土壤完掘状況(南から)



S K 128土壤完掘状況(南から)



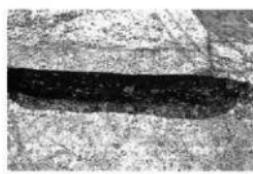
S K 50土壤断面(北西から)



S K 50土壤完掘状況(南から)



S K 208土壤検出状況(南から)



S K 208土壤断面(西から)

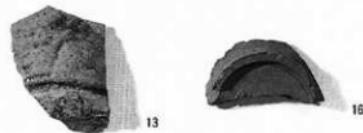


S K 208土壤完掘状況(南から)

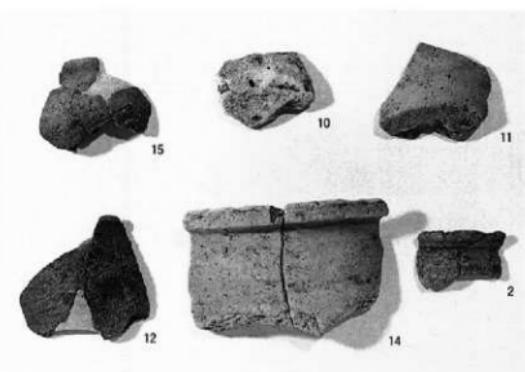
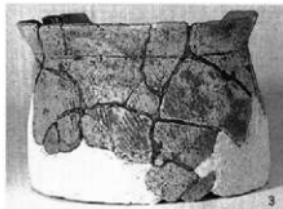


S K 157土壤断面(南西から)

图版 8



図版 9



付 編

四ツ塚遺跡から出土した骨の同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

四ツ塚遺跡（山形県西村山郡河北町大字吉田字馬場所在）は、寒河江川と法師川に挟まれた緩やかな斜面状に立地する。奈良・平安時代の集落を中心とした遺跡で、多くの遺構・遺物が検出されている。今回は、時期不明の土坑から検出された骨の種類を知るために、同定を実施する。

1 試料

試料は、3次調査北側調査区東端付近に位置するSK157覆土から検出された、長さ約9cmの骨片1点である。他に遺物を伴わないので、所属時期は不明である。

2 分析方法

骨表面に付着した土を筆により除去し、肉眼により種と部位の同定をおこなう。なお、同定は慈恵医科大学の竹内修二先生にお願いした。

3 結果

同定の結果、直線的で長さがあることから、四肢の長骨の骨体である。間接部分の欠損と被熱による変形のため特徴が失われていて、種同定是不可能である。緻密質の厚さと大きさから、中～大型の哺乳類と考えられる。もしヒトであるとすれば、断面の形態から上腕骨のあるいは脛骨の一部と考えられる。

骨の外表面は白色を呈し、長軸に直行する方向の湾曲したひび割れが複数見られる。また、部分的に膨らみ・反り等の変形が見られ、全体的に収縮している可能性もある。これらの特徴から、当試料は有機成分が残った状態で、900℃以上の高温で焼かれた可能性がある（アンドリュー・チェンバレン、1997）。

4 考察

SK157の覆土より検出された骨片は、中～大型哺乳類の四肢骨の一部であり、比較的高温で焼かれた焼骨である。この骨の性格については、周囲の遺構・遺物の状況とあわせて考える必要がある。周囲に火葬施設などの存在が確認できるようであれば、そのような場所から混入した火葬人骨の一部である可能性も生じる。

引用文献

アンドリュー・チェンバレン（1997）「大英博物館双書 古代を解き明かす① ヒトの考古学」、堀江 保範訳、學藝書林。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第90集

四ツ塚遺跡第3次発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

☎023-672-5301

印刷 大場印刷株式会社
